

〔要旨〕

都市の格子状街割は古典古代都市から近・現代都市まで連綿と引き継がれてきている、都市計画による都市空間構成の基本的パターンである。

現代都市では、この伝統的な街割デザインはあまり評価されなくなって、都市設計では一般的ではなくなったが、その理由として考えられるのは、その幾何学的形状がもたらす街の単調性、画一性、そして硬直性や、空間のヒエラルキーの形成の困難性、さらには、土地基盤と上もの乖離などの欠陥の故である。さらにまた、近代産業社会になって、自動車都市構造に決定的に影響を及ぼして、道路に序列性が必要になったことや、超高層建築や大規模で総合的な開発の登場など、技術の進歩も原因として考えられる。

しかし、こうした格子状街割が何千年にもわたって行われてきた背景には、その欠陥を補って余りある長所が隠されているからであろう。

本研究は、過去の格子状街割のもつ、可能性を検証することで、格子状街割の再評価と現代都市への応用可能性を明らかにしようとするものである。

研究の大要としては、都市史のなかで明らかになっている、過去の、及び現存する、古今東西の代表的格子状街割の事例を収集、整理して、比較分析する。

比較分析の視点は、格子状街割の起源とその社会的成立条件、道路と建築と街区の関係、格子状街割の寸法モジュール、格子状街区の変容現代都市デザインと格子状パターンなどである。

事例は資料的制約にしばられるが、古代ギリシャローマ、古代中国、古代日本、中世ヨーロッパ、バロックの都市の時代、近代都市から収集した。

キーワード

1. 格子割り
2. 街区
3. 都市基盤
4. 街路パターン
5. 都市形態